
魔法使いと少女

あさい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと少女

【Nコード】

N2426U

【作者名】

あさい

【あらすじ】

森の奥に住む魔法使いは何か代償を払えば願いを叶えてくれると言われている。そこに毎日のように通う少女がいた。少女が欲しいものは「家族」。

その森には魔法使いが住んでいる。

森の奥にある小さな小屋に、昔々から住んでいる。

願いがある者が生贄とともにそこへ行けば、魔法使いは願いをかなえてくれるといわれている。勿論小屋へ行くまでの道は巧妙に隠され、容易にはたどり着けないようになっていたのだけれど。

そんな小屋の戸を、今日も小さな少女が叩く。

「おはよう、もうお昼だよ魔法使い」

「……また君か」

勝手にドアを開けられて魔法使いは眉をしかめる。毛布の中へと潜り込もうとするけれど、それより早く少女に引つpegされる。開けられっぱなしのドアから入りこんでくる外の空気にぶるりと体を震わせた。

少女は毛布をベッドの端に置き、腕を組んで仁王立ち。

「本当にあなたはねぼすけさんだね。すごい魔法使いなんだから、朝はお日様と一緒に起きて、夜は日付が変わるまで薬を作つてると思つたのに」

「おかしい……。なんで入つてこられるんだ、俺を必要としている人間以外は入つてこられない結界のはずなのに……」

ベッドの上に座り込み頭を抱える魔法使いに、少女はけろりとした顔で答えた。

「だって私、魔法使いのこととっても必要としてるもの」

少女は持っていたバスケットの中からパンを取り出す。それを小さなテーブルの上に置き、ぱたぱたと小屋の外へと出ていく。

魔法使いはため息つきつつ丸められた毛布を丁寧に広げた。髪をかきむしりつつカーテンを開ける。とたん、狭い小屋の中に明るい光が広がる。少女は水を入れたグラスを持って戻ってくる。明るい小屋の中を見て顔をほころばせた。そういうところは年相応で可愛いんだがと魔法使いは肩を落とす。森の魔法使いのところへ毎日通い叩き起こすのははたして可愛い所業なのか。

グラスがテーブルに置かれ、食事の準備は出来上がり。毎朝（少女曰く昼だけ）のことで、慣れてきている自分が空恐ろしい。誰かが来なければ魔法使いは目が覚めない。目が覚めない限り、毎日の規則正しい食事なんて無縁で眠り続けるのだ。

二人共椅子に座り、食事が始まった。

「本当は君は入ってこれないはずだろう。俺は、君の願いはかなえられないと答えた。その時点で君が俺を求めるのは終わるはずだ」

少女が当初持ってきた願いは『家族がほしい』。生贄は森で捕まえたという兎。

雨を降らせたいたとか病を治す薬がほしいだとか、そういう願いならば魔法使いはかなえられる。しかし、家族なんて彼には作り出せない。

故に断つたにも関わらず、少女は毎日ここへと通い詰めていた。

少女はごくんと口の中のパンを飲み込む。つられるように魔法使いもパンにかじりつく。まあ、美味い。

「きっと私は世界で一番魔法使いを必要としているよ」

「何度も言うけれど、俺は家族は創りだせない」

「だから私、考えたの」

口の横にパンくずを付けて少女は威張り顔。呆れてパンくずを取ってやる。

魔法使いは家族を知らない、忘れてしまった。誰だって知らないものは創れない。

彼はとても長い間生きてきた。最初からこの森に住んでいたわけではなく、さまざまなところを旅したり、ふらりと来た町に居ついてみたり、またどこかへ行ったりを繰り返していた。昔は覚えていた色んな人を、彼はゆっくりと忘れていく。自分だけ年を取らないまま周囲の人は老い死んでいく。その人たち皆なんて覚えていられなくて、親も、友人も、気づけば忘れていた。

そしてここにひとり住んでいる。

胸を張った少女は、ぱつと笑みを見せた。

「私とあなたが家族になればいいのよ！」

「……うん？」

「だからっ、私とあなたが夫婦になって、家族になればいいの！」

それは、また、確かに家族が得られ、今後増える可能性もあるけれど。

とつぴょうしもない。

ぽかんとしてしまった魔法使いに、少女は言葉をつづけていく。

「私とあなたが夫婦になって家族になって、子供もたくさん生まれたら家族がほしいって願いはかなうわ。素敵でしょ？」

あなたが必要なの。私は、あなたを誰よりも求めている。だから毎日だってここにもこれるの」

少女が入ってこられた理由はとてもよくわかった。結界のかけ方を間違っていたようだ。少女は害をかなえてくれる相手としてではなく、家族として魔法使いを求めているというわけだ。どちらにし

ても魔法使いを求めているということには代わりない。だが、それが分ったところで、いや、わかったからこそ。

「ば……」

「ば？」

「莫迦なことを、言うな」

受け入れられるとは限らない。

眉間にしわを寄せて少女を見れば、彼女は唇を尖らせている。

「莫迦なことなんて言ってない。私はあなたのことが大好きだよ。だから、あなたと家族になりたい」

「それが莫迦なことだ」

口をとがらすすぐさは子供っぽいが、目は本気だ。しかし本気だからといってうなずけるとは限らない。

「誰かと家族になろうなんて思ったことはない」

ずっとひとりで生きてきた。それで何か困ったことや、寂しいと思ったことなんてない。

「君のそれは俺が魔法使いだから、願いをかなえなければならない存在だと思ってるから出てきたんだ。別に俺は必ず願いをかなえなければならないわけでもない」

家族がほしいと思い、それをどうすればかなえられるかを考え、その結果だろう。しかしその相手はおそらく魔法使いではなくてもいい。男でさえあればいい。だったら、魔法使いでないほうがいい。少女の目に涙がたまっていく。口を真一文字に引き締めこちらを

睨みつけている。その表情を見てさすがに言いすぎたかと思い、ふと言葉を和らげる。……さすがに、子供を泣かせることには罪悪感がある。

「それに、俺と君の年の差もある。いくつ離れてると思ってるんだ」
「年の差なんて関係ないよぉ……」
「少なくとも、君が俺と同じぐらいにならないと無理だ」

少女はうつむいた。とたんぱたとしずくがテーブルに落ちるが見えないふりをした。

魔法使いと少女は外見では7ほど差がある。実際のところ魔法使いは不老不死だから実年齢ではもっともつと差があるだろうが、とにかく。7年もたてば少女はほかの、まともな人間を好きになるだろう。誰かしらに恋をし、家族を創りたいとおもう人間がいるだろう。魔法使いのことも忘れるかもしれない。きっと魔法使いが少女を忘れるように。

「じゃあ、えつと……5年後、私と家族になつてくれる？」
「もしそのときまで君が俺のことを覚えていて、未だそんな莫迦げたことを言うならね。それに、君が出て行ったら直後に5年たつまで君がこの森には入れないように結界をかけなおすよ」

少女は立ち上がった。ドアのところへ。ドアを開け、それからきつとこちらを睨みつけた。

「絶対、あなたと家族になるんだから！」

殴りつけるような音を立ててドアが閉まる。そして草むらを駆けてゆく足音。魔法使いは息を吐きだした。使った皿とグラスを洗い、無精して魔法で乾かす。片づけ、カーテンを閉める。彼女に宣言し

た通りに5年後までに入れないよう結界をかけなす。少女の座っていた椅子に座れば、その足元に彼女が持ってきていたバスケットがあった。忘れ物らしい。苦笑して取り上げて棚の見える位置に押し込む。そこまでしてからベッドにもぐりこんだ。

眠ろっ、また誰かが来るまで。願うらくはそれが十年後、二十年後、さらにその先がいい。

「……家族、か」

それはいったいどんなものだったか。

自分が誰かの家族になる未来なんて、魔法使いの想像上の未来には、どこにも存在しなかった。



誰かがドアをたたく。魔法使いはのそりと体を起こした。のろのろとドアの前へと行く。カーテンから漏れる明かりが今は夏だと主張している。小屋の中は空気を調整しているから暑さは感じないが、外へ行けば熱気に包まれるだろう。

誰かが来なければ彼は延々と眠り続ける。前回から何年たったんだろっ。時たま来る薬を求める人や雨を求める人、豊作を願う人を助けてやりながら、ゆるゆると眠り続けていた。

ドアを開ける。

「誰だ」

若い娘だった。そのまっすぐな瞳がどこかで見た気がするがすぐには思い出せない。ここ何回かのうちに来た願う人々の家族か何か。家族、という単語で何かが出てきそうな気がしたが、錆びついている彼の記憶力では思い出しきれない。

「願いがあゐるの」

娘は微笑んだ。

「生贄は」

「私」

間髪いれずに答えられる。

自分を差し出すということは随分と大きなものなんだろうなと魔法使いは今までの経験から思う。誰を殺せとか、誰を生き返らせろとか。大抵が大掛かりな魔法になるのでその方法を頭の片隅から引っ張り出す。

「願いは」

「家族が欲しい」

「君は――」

娘になった少女はバスケットを顔の横に掲げる。上にかけられた布を押し上げるようにパンが覗いている。

「5年たつてやつと気付いたけど、最初からこうすればいいのよ。私をあげるから家族をもらうわ。だいたい家族つてそんなものでしょ？ それにしてもあなた全然老けないのね。もしかして不老不死つて噂は本当？」

啞然としている魔法使いを押しつけて彼女は小屋に入る。棚から皿を出そうとしてバスケットに気付き、目を細めて取り上げる。

「今度こそ、私はあなたと家族になるわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2426u/>

魔法使いと少女

2011年6月21日22時33分発行